

井形 昭弘 先生を偲ぶ

納 光弘

公益財団法人慈愛会会長
元鹿児島大学第三内科教授



故 井形昭弘先生

〔ご逝去時の役職〕名古屋学芸大学学長、名古屋学芸大学短期大学部学長〔現職〕鹿児島大学名誉教授、日本尊厳死協会名誉会長、あいち健康の森健康科学総合センター名誉センター長、スペシャルオリンピックス日本・愛知名誉会長、名古屋学芸大学名誉教授、名古屋学芸大学短期大学部名誉教授、国立療養所中部病院名誉所長

〔略歴〕1928年浜松生まれ（御尊父の郷里は徳島県）。太平洋戦争敗戦間際に広島江田島の海軍兵学校入学。原爆の閃光と爆風を体験。1946年名古屋の第八高等学校入学。1950年東京大学医学部医学科入学。1955年東京大学医学部第三内科沖中重雄教授教室に入局。1960年～1962年ドイツ留学。1971年鹿児島大学医学部第三内科教授。その後、鹿児島大学長を経て、国立療養所中部病院長として国立長寿医療研究センターの創設に尽力。あいち健康の森健康科学総合センター長として愛知県の健康づくり施設を築き、2002年名古屋学芸大学学長に就任。また、厚生労働省社会保障審議会委員として介護保険の導入に努め、日本尊厳死協会理事長として終末期医療にも関与する。野口英世記念医学賞、武田医学賞、紫綬褒章、勲二等旭日重光章等多数。

名古屋学芸大学学長の井形昭弘先生は、2016年8月12日急性心不全のためご逝去されました。享年87歳でした。近親者による告別式は8月14日に高德院で行われました。高德院には、16年前（2000年）に亡くなられた玲子奥様のお墓があり、井形先生のご遺骨はこの井形家の墓に安置されました。奥様が亡くなられてからは、井形先生は自らを『独居老人』と称して近くの豊明市のご自宅にお一人で住まわれ、『納君、料理が大分うまくなったよ。コンビニにも自分で買い物に行くけど、結構楽しいものだよ。』と笑顔で話しておられました。

現職の学長のご逝去であったので、学校法人中西学園／名古屋学芸大学並びに名古屋学芸大学短期大学部による大学葬が、2016年10月29日に覚王山・日泰寺において執り行われ、井形先生を偲ぶ実によくの方々から甲間に訪れ、外国出張中で参加できなかった日野原重明先生からの弔辞も朗読されました。この弔辞の中で日野原先生が述べられた『井形先生とは国際内科学会の理事として共に汗をかき、私はコロンビアで

開催された18回国際内科学会総会にて、井形先生はペルーで開催された第24回国際内科学会総会にて理事長を務めました。ペルーの総会では重要な講演にスペイン語での同時通訳が入り、ペルーの皆さんが参加しやすい工夫がされていました。』のお言葉はとても印象深いものでした。このような経緯もあり、井形先生と日野原先生は深い友情で結ばれた仲でありました。（日野原先生は現在105歳のご高齢にもかかわらずお元気に活躍中で、井形先生こそは日野原先生と同じようになられるとと思っていましたが----。）

ここで、井形先生についてさらにお話したいと思います。私が初めて先生にお会いしたのは、先生が鹿児島大学医学部に新たに創設された第三内科の初代教授として赴任され、縁あって井形内科創設のメンバーに参画させていただいた時です。この時先生は、内科教授としては国内で一番若い42歳でした。当時は山崎豊子の『白い巨塔』が評判になった時代で、教授の権力は絶大という時代でした。ところが井形先生は、当時では考えられない教室運営をされました。病棟当直も医局員と全く平等にされ、鹿児島大学医学部に驚愕のショックを与えられたのでした。先生は教授会にも大きな影響を与え、徐々にではありましたが、全国でもまれな民主的・良心的な教授会へと発展していったのです。

井形先生との長いお付き合いのなかで、私は一度も怒られたことがありません。『私には怒りのホルモンが欠如しているのだよね。』と言っておられました。私の知る全ての人が、皆、井形先生から怒られたことはないとのことですし、私が思い出す井形先生のお顔はこやかな笑顔だけしかありません。井形先生は袖触れ合った全ての人に、分け隔てなく、愛情を注いでこられました。常に相手の立場に立って考えておられました。患者さんに対しても同じで、神経疾患は治せないものが多いけど、治す方法を考えることが主治医の務めだと私達に話して下さいました。東大神経内科時代に、戸田の病院で、尿が緑色のスモン（SMON: subacute myelo-optico-neuropathy の頭文字）の患者さんに出会った時、尿の分析をすることでスモンの原因が分る可能性があると考え、東大薬

学部で分析を依頼し、わずか3日後にはその緑色の物質が、実は患者さんが服用していた整腸剤のキノホルムであったとの報告を受け、これを契機にして、厚生省がキノホルムの発売中止を指示し、以後、スモン患者の新規発生が途絶えた画期的な出来事を、先生から直接お聞きしました。スモンは被害者1万1千人を越す我が国最大の薬害事件でしたが、井形先生方の迅速な行動が、その新規発生の根絶につながったわけです。

また、先生の鹿児島大学時代に私達は先生のご指導のもとに新しい脊髄疾患を発見し、HAM (HTLV-I associated-myelopathyの頭文字)と命名したのですが、この発見も井形先生の鋭いご見識なしには成しえなかったと考えています。

先生は、火中の栗を拾う様な難しい課題であった水俣病の抜本的な解決のためにも全力で取り組まれました。井形先生が着任早々、我々若者におっしゃった言葉が今も頭に焼きついています。「我々は水俣病の被害者救済に全力で取り組まなければならない。水俣病は、決して熊本県だけに存在する問題ではない。水俣市は、鹿児島との県境にあり、鹿児島県にも大勢の被害者がおられるにちがいない。ただだまって待っていたのでは救済が遅れてしまう。掘り起こし検診が必要だ。被害者を探し出し、救済しなければならぬ。その為には、神経内科の専門医の我々を始めとして、鹿児島大学医学部が全面的に頑張るしかない。大変な作業で、一見報われない作業であるが、被害を受けた患者さん方のために、一緒に頑張ってもらえないか。」と。この、井形先生の言葉に、私達若い医師達は奮い立ちました。検診業務は、大変困難なものでしたが、私達はまさに歯を食いしばって頑張ったのでした。井形先生はご自身の熱い情熱と信念を周りの人の心に伝え、燃え上がらせるお力をお持ちでした。そしてまた、井形先生は、ご自身が正しいと判断されたことには、どんなに圧力がかかろうとも怯まない勇氣ある方でした。

井形先生を語る時、忘れてはならないのが、先進的な提言と実行力です。鹿児島大学病院長の時には、全国に先駆けて

コンピューターの導入を推し進め、いち早くIT化を成し遂げられ、全国のモデル病院になりました。鹿児島大学学長時代には、鹿児島大学が基幹校となって宮崎大、佐賀大、琉球大と協力して農学部の連合大学院を全国で初めて設立され、そして又、桜島がある鹿児島の懸案であった火山学講座の設立も成し遂げられました。名古屋学芸大学初代学長としては、管理栄養学部、メディア造形学部、ヒューマンケア学部の三つの学部を創設し、世の中が必要としている人材を送り出し、全国から入学希望が極めて多い人気大学に育てあげられたのでした。

また、脳死臨調をまとめ上げ、脳死移植に道筋をつけられた手腕は、井形先生だからこその高い評価を受けておられます。また、日本尊厳死協会の理事長時代の2005年に、14万人の署名を携えて尊厳死法制化の国会請願を行い、将来への道筋も作られました。介護保険の導入にも尽力され、要介護の決定に世界で初めてコンピューターを導入され、軌道に乗せることにも成功されました。

井形先生のご功績は上げると限りがありませんが、紙面の制限もありここで筆をおきます。

先生は私達周囲の者にとって、暖かい道しるべの太陽のような存在でしたし、困ったときの精神的支えでありましたので、今の私たちの虚脱感は言葉に表せないほど大きなものがあります。

先生のご冥福をこころよりお祈りいたします。

どうぞ、ゆっくりとお休みください。

合 掌

文 献

- 1) Igata A, Toyokura Y. Subacute myelo-optico-neuropathy. *Munch Med Wschr* 1971;31:1062.
- 2) 井形昭弘. 尊厳死. *脳と神経* 2006;58:639-643.
- 3) 井形昭弘. 水俣病の医学. *日本医事新報* 1988;3352:11.
- 4) 納 光弘. HAM—その発見から今日まで—. *神経内科* 2011;75:356-360.